

皮膚科のトリビア

228

浅井 俊弥(浅井皮膚科クリニック)

<http://www.asai-hihuka.com/trivia.html>

トリビア(trivia)=3を意味するtriと+道を意味するviaでもとは三叉路の意。古代ローマで三叉路が多かったことから「どこにでもある場所」、そこから転じて「瑣末なこと」となり、今では雑学的知識、豆知識、などを意味する言葉として定着している。

本欄は、小誌・浅井編集委員が学会・研究会などで見聞きした「皮膚科のトリビア」をその都度まとめ、連載しています。ご意見等ございましたら、ぜひ小誌「声」欄までお寄せください。

●第905回日本皮膚科学会東京地方会から

令和5年2月18日

パドセブ®による薬疹の作用機序

70歳代の男性。膀胱癌の多発転移でパドセブ®を使用。19日目から全身に紅斑と水疱が生じた。使用を中止し、中毒性表皮壊死症(toxic epidermal necrolysis: TEN)に準じた治療を行った。

パドセブ®は、尿路上皮の癌細胞に発現しているnectin-4を特異的に認識する抗体であるエンホルツマブに、微小管障害作用をもつ低分子薬であるモノメチルアウリスチンE(MMAE)を結合させた抗体薬物複合体(antibody drug conjugate: ADC)。標的であるnectin-4が皮膚にも発現していることから、nectin-4の障害によってTENと同様の表皮剥離が生じると考えられ、死亡例も報告されている。皮膚障害は使用例の47%と高頻度に認められるので、皮膚症状の観察を充分に行う必要がある。

一言コメント

「皮膚障害のすべてが水疱になるわけではなく、紅斑や播種状丘疹でとどまる例のほうが多いらしい。その際は本剤の減量とステロイド外用で治療を行い、再投与後の再燃がない例もあるとのこと。」

●HZ・Sフォーラムから

令和5年2月26日

デルマクウィック®HSVの性能

デルマクウィック®HSVは単純ヘルペスウイルス(herpes simplex virus: HSV)に対するヒトのモノクローナル抗体を使用している。単純ヘルペス感染症を疑う性器以外の皮膚から採取した検体では、キットで陽性だった52検体のうち、51検体がリアルタイムPCRでも陽性だった。1検体はキットの偽陽性と考えられる。

キットで陰性だった79検体のうち10検体がPCR陽性でHSV-1が7検体、HSV-2が3検体だった。これは、検体中のウイルス量が測定限界以下だったためである。

同様に性器由来の検体ではキット陽性の57検体はすべてPCR陽性。キット陰性の71検体のうちPCR陽性は19例あり、HSV-1が3検体、HSV-2が16検体だった。

一言コメント

「臨床診断のために有用なキットだが、ウイルス量が足りなくて陰性と評価せざるを得ない場合が少なくないことはよく経験する。陽性だったら陽性、陰性だったら陰性か、あるいはウイルス量が足りないかのどちらかと考えておくのがよいだろう。」

●ポリファーマシー対策報告会

令和5年2月27日

ポリファーマシーと
処方カスケード

高齢者のポリファーマシーに関する講演。ある薬剤によって生じた副反応に対して対症療法的に処方された薬剤で、ドミノ的に副反応が出現することを処方カスケードという。たとえば関節炎に対してNSAIDs、それによって生じた高血圧にカルシウム拮抗薬、足の浮腫が生じて利尿薬が使われ、痛風を発症。アロプリノールで体位性低血圧、消化不良、全身倦怠感。こうなると診断がむずかしくなる。

一言コメント

「降圧薬内服中の高齢者で下腿の浮腫をみることは日常的で、対応に困ることが多い。もともとアドヒアランスが悪い患者が入院や施設入所で、内服薬をしっかりと飲むようになって、かえって副反応が出やすくなる場合もよくあるらしい。」

●第3回皮膚感染症くらぶ勉強会から

令和5年3月12日

generalized verrucosis
(汎発性疣贅症)

generalized verrucosisは、ヒトパピローマウイルス(human papillomavirus: HPV)に対する免疫応答の低下を背景として、全身の皮膚に疣贅が播種する疾患。ツリーマンとしてテレビで報道された。汎発性疣贅症をひきおこす免疫異常は、疣贅状表皮発育異常症(epidermodysplasia verruciformis: EV), WHIM症候群、複合型免疫不全症、高IgM症候群、Wiskott-Aldrich症候群、GATA2欠損症、Netherton症候群など多彩。古典的なEVは、TMC6, TMC8, あるいはCIB1遺伝子変異をもち、皮膚に常在するβ属HPV(HPV-5,8,12など)に対して選択的な易感染性を示す。GATA2欠損症は臨床像として汎発性疣贅のほか、抗酸菌感染症、真菌感染症、水痘の重症化などの感染症、MDS/AML、肺胞蛋白症およびリンパ浮腫など多岐にわたる臨床症状を呈する。これらの臨床像に単球欠損を認めた場合、本疾患を強く疑う必要がある。

一言コメント

「EVだけではないということがわかった。自然免疫異常症の診療ガイドラインに診断フローチャートが示されている。勉強になった。」

●第3回皮膚感染症くらぶ勉強会から

令和5年3月12日

爪部Bowenは性感染症か

爪部のBowen病は通常のBowen病とは異なり、20歳代、30歳代の若い症例もあり、136例の集計では平均年齢が52歳であった。病変から16, 18, 56など粘膜型ハイリスクヒト乳頭腫ウイルス(human papillomavirus: HPV)が検出される例があり、爪がこれらのリザーバーとして働き、感染源になっている可能性がある。男女比は男性が女性の2.3倍で、女性患者の1/3はほかのHPV関連疾患を有していた。パートナーへの感染を考えさせる症例もあって、性感染症として位置づけるのが妥当。爪に縦線が入る爪甲色素線を呈するタイプと後爪廓に広がるタイプに分けられるが、いずれも爪母から病変が連続しているのが特徴。右I・II・III指と左III指に好発する。

一言コメント

「後爪廓のくぼみに粘膜型ハイリスクHPVが潜んでいるというのが恐ろしい。臨床的に色素線条にしかみえない症例もあるとのことで、注意してみていかなければならないと思った。」